

# 連携型中高一貫教育校における六カ年カリキュラム試案

池田 貴之

## 一 はじめに

### 勤務校について

今年で教員生活八年目を迎えた。現在の勤務校で二校目になる。現在勤務する喜界高等学校は、奄美大島の東、太平洋に囲まれた喜界島にある唯一の高等学校である。普通科と商業科の二学科を設置する学校で、五十三年の歴史を有する生徒数約三百人の小規模校である。

一島一校であり、また島内三中学校の卒業生のほぼ八割が本校に進学するという状況にあるため、生徒は幼少の頃からの顔見知りという者がほとんどで、家族的な雰囲気のある学校である。生徒たちは純朴で素直な生徒が多い。しかしその反面、競争心や向上心に欠しく、この傾向は学力面において顕著である。また学力の個人差も大きい。前任校が普通科のみの進学校であったために、赴任当初は前任校とのあまりのギャップに悩んだものである。赴任から四年目を迎え、この状況に次第に慣れてはきたものの、生徒の多様な進路

希望を踏まえつつ（大学進学希望者から就職希望者まで）、生徒の興味・関心を引き出しながら基礎学力を定着させ、更なる学力向上を目指すための授業を模索しつづける毎日であり、三十五名の教員が同じような課題を抱えながら教育活動に取り組んでいる。

本校が島内の三中学校とともに、平成十二年度から取り組んでいる中高一貫教育実践研究は、本校の負う一島一校という教育環境をむしろメリットとし、中高の教員が相互に連携しながら、六年間というスパンで生徒の自己実現をサポートしよう（特に、個性の伸長、学習意欲の喚起・基礎学力の定着、基本的生活習慣の確立を目指す）というねらいで導入を決定した。三年目を迎えた現在、まだまだ多くの課題はあるものの、地域の教育力も活用しながら、さまざまな研究成果を上げている。

### 喜界地域中高一貫教育実践研究について

喜界地域における中高一貫教育実践研究は、「資料」に掲げた基本方針の下に、中高一貫教育実践研究推進委員会、四校合同部会（各

教科部会、「総合的な学習の時間」部会、特色ある教科「きかい」部会、生き方・在り方部会」を設けて取り組んでいる。

これまでも部分的に各中学校との連携はあったものの、四校が足並みをそろえて合同で教育活動に取り組むということはほぼ皆無であったために、同じ教科であっても、各校でどのような学習を行っているのかはもとより、お互いの顔も名前も知らないという状況からのスタートであった。実践研究三年目を迎えた今、いちばんの研究成果は、四校の教員がお互いに生徒のことについて、また教科指導について忌憚なく意見交換ができるようになったことではないかと思う。今回発表させていただく六カ年カリキュラム試案は、この「いちばんの研究成果」の中間報告である。来年度からの中高一貫教育本格実施に向け、率直な御指導、御意見をいただき、カリキュラムの完成を目指したいと考えている。

## 二 六カ年カリキュラム試案

中高一貫六カ年カリキュラムは、「基本方針」の「教育方針」および「研究課題」の一つ「教科指導に関する課題」を具体化するものとして、実技教科を含むすべての教科で試案が作成され、本格実施へ向けて検討が進められている。国語科においても、生徒の国語力の実態と新学習指導要領の目標とを踏まえて検討を重ねてきた。先に紹介したように、本校の生徒の学力は決して高いとは言えない。高校入試においても、毎年県の平均点よりも五、十点ほど下回って

いる（国語）。それでも、中学校では「高校入試があるから」ということで何とか学習意欲を維持しているという面が少なからずある。中高一貫教育が導入され、研究校から実践校になると、連携する中学校からの本校受験生には、「ゆとり」の一環として、選抜のための学力検査（全県下統一の学力検査）は実施せず、「簡便な入試」（本校では現段階ではまだ検討中であるが、先進校では、作文と面接で実施している学校が多い）を行うことになっており、特に保護者の間からは、入試選抜に学力検査がなくなることによるさらなる学力低下を懸念する声が大い。また、中高一貫教育を導入することで大学進学率のアップを期待する声もある。このような声をカリキュラムにどのように反映させ、生徒の基礎学力の充実・学力の向上につなげるかという点がカリキュラム作成の最大のポイントであった。

一口に「カリキュラムを作る」と言っても、恥ずかしながら、私自身は、その年度に使う教科書を中心に、教材の羅列に少し手を加えた程度の「年間学習指導計画」を作成し、その年度で十分につけられなかった力は、持ち上がった次の学年で……（これまで幸いなことにはほぼ持ち上がりで同じ生徒を三年間指導することができた）という程度の、とても「カリキュラム」とは言えないようなものしか作ってこなかった。さらに、不勉強極まりないことに、中学校の学習指導要領を読むこともなかった。よって、系統的な国語の学習を提供できていなかった自分のこれまでを反省することしきりで、研究に取り組んだ次第である。

本校生の国語力とカリキュラム作成の視点

本校生の国語力の最大の問題点は、「言葉の力」、すなわち十分な「語彙力」を具え、それを「適切に理解し、使いこなす力」が欠けているという点である。日常生活における「コミュニケーション」あるいは、「表現」の基礎となるものは「言葉」である。しかし、

本校生は、その「言葉の力」が十分に習得されていないために、「話す・聞く」「読む」「書く」といった言語活動の場面において十分な活動ができな

い。これにはもちろん、読書量の不足や小学校段階からの指導が十分でないこと、つまり我々教師の側の指導の工夫・徹底の不十分さもあるだろうが、それ以上に、家族的な雰囲気の中で学校生活を送ってきたために、「言葉」によらないコミュニケーション

すべてを「言葉」にしなくとも通じ合う関係が生徒たちの間ですでに確立されていることが大きな要因だと思われる。これはこれで生徒同士が深い絆を有しているというこの表れであり、すばらしいことではある。しかし、本校生は、卒業するとはほ全員が鳥を離れていく。つまり、卒業後は「言葉」によるコミュニケーション

がどうしても必要不可欠になるのである。よって、国語科としては、中高六カ年をかけて、生徒に十分な「言葉の力」をつけさせ、優れた日本語の使い手となることを目標としてカリキュラムを作成した。

また、国語力はらせん状に高まっていくものであり、この学年段階でこの事項を指導しなければならぬというものはつきりしているわけではない。そこで、「話す・聞く」「読む」「書く」活動ならびに言語事項における到達目標と具体的な学習活動を掲げることとで「カリキュラム」とし、今後高等学校でも導入されるであろう

「絶対評価」にも対応できるようにした。さらに、中高六年間を二学年ごとに区切り、おおよそ三段階に分けて到達目標や指導事項を設定した。これにはさまざまな意見があると思うが、中高一貫教育で生まれる「ゆとり」や中高の教員間で連携を取りながら指導ができるというメリットを最大限に生かしたいということを考慮したものである。

なお、本カリキュラムが本格的に実践に移される平成十五年度入学生の教育課程は〔図1〕のようになっている。平成十三・十四年度の入学生については次の通り。

○普通科	一年……国語Ⅰ（四単位）
	二年……国語Ⅱ（四単位）
	三年
	〔文系〕……国語表現（三単位）
	古典講読（三単位）
	〔理系〕……国語表現（三単位）
	*平成十四年度入学生は二単位
	古典講読（二単位）
○商業科	一年……国語Ⅰ（三単位）
	二年……〃（三単位）
	三年……国語表現（三単位）

【図1】平成15年度本校入学生教育課程（国語）

中1	中2	中3			高1	高2	高3			
国 語  140	国 語  105	国 語  105	→	普通科	文 理 コ ー ス  情 報 コ ー ス  ④	現 代 文 ②	古 典 ②	現 代 文 ②	古 典 ②	*国語演習②
						現 代 文 ②	国語表現Ⅰ ②	現 代 文 ②	国語演習 ②	
				商 業 科	④	国語表現Ⅰ ②	国語表現Ⅱ ②	*国語演習②		

\*は選択教科。

※普通科「文理コース」は大学進学者対象、「情報コース」は大学進学以外の生徒を対象。

### 三 おわりに

本校における中高一貫教育は、来年度から本格実施の予定であり、このカリキュラムも実践へと移されることになる。しかし、「カリキュラム」という器が出来上がっても、器に見合う中身Ⅱ「学習活動の工夫（効果的な指導方法の研究）」がともなわなければ、画餅に帰してしまいうし、生徒の学力向上や「言葉の力」の育成は望むべくもない。よって、これから実践までの約半年間で、中身を充実させるという課題が残されている。中高一貫教育校であるというメリットを十分生かし、乗り入れ授業等の活動を通じて研鑽を深めながら、実践段階を迎えたいと考えている。

大学を卒業して八年。最近になってようやく、「教師」という仕事がおもしろくなってきた。これまではおもしろさを感じなかったというわけでは決していないが、自分の中で「教師」の仕事を余裕を持って楽しめるようになってきたような気がしている。しかしその反面、「国語教師」としての研鑽は不十分だったように思う。今回のカリキュラム作成を通じて、このことを痛感させられた。

また、本試案は、第四十三回広島大学教育学部国語教育学会にて報告させていただいたが、報告後の質疑応答でさまざまな御意見、御指摘、御助言をいただいた。この誌面を借りて改めて御礼を述べさせていただく。「家族的な雰囲気の中で、どのようにフォーマルな場を設定するか（どのように生徒たちに意識させるか）」「もっと『連携型』の中高一貫校であることを意識したカリキュラムにして

〈宮界地域中高一貫教育 6カ年カリキュラム(国語)〉  
 [6カ年指導目標] (1)「伝え合う力」「考える力」を育成する。  
 (2) 基礎学力としての日本語力の定着を図る。

	中学校 1 年	中学校 2 年	中学校 3 年	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年					
ねらい	<p>〔話す・聞く、書く、読む〕の言語活動に慣れる〕</p> <p>○聞き取りやすい話し方、メモ聞き等の習慣            ○発表・話し合いのルールの習得            ○文字を音声で表現することに慣れる            ○スピーチ I (声を用いる、紹介)            ○声の大きさ・強弱、話すスピード、間のとり方            ○グループワーク・エスカレーション・全体発表            ○インクデビュー            ○音読・群読</p>	<p>〔相手や目的に応じた「話す・聞く、書く、読む」の言語活動ができる〕</p> <p>○情報を整理して話す、要点を聞き取る            ○討論の仕方            ○イメージ豊かに声で表現する            ○スピーチ II (弁論、調査・研究報告)            (相手に分かりやすく伝えるように工夫する)            ○シンポジウム            ○ティベート            ○朗読(小説・詩歌)、シナリオ劇</p>	<p>〔より効果的に「話す・聞く、書く、読む」の言語活動が実践できる〕</p> <p>○聞き手に印象深く伝える方法を考えて実践する            ○プレゼンテーション(情報機器の活用)</p>	<p>○卒業論文を書く            これまでの6年間の学習の総決算として、個人でテーマを設定し、「卒業論文」を書く。</p>	<p>「話す・聞く」</p> <p>○話し言葉と書き言葉を区別しながら書く            ○文の組み立てに注意しながら書く            ○「書くこと」の習慣づけ            ○スピーチ原稿、発表メモ・材料を集める            ○紹介文 [200~400字]            ○生活作文            ○読書感想文 [600~1000字]</p>	<p>「書く」</p> <p>○構成を意識しながら書く            ○読み手を意識しながら書く            ○新聞投稿 ○読書レポート            ○意見文 [800~2000字]            →問題点・課題を明らかに、情報収集            ○鑑賞文 [300~600字]            ○詩歌の創作(歌集作り)</p>	<p>○さまざまな文章を書き慣れる            ○テーマ作文 [600~1200字]            ○自伝 [2000字~]            ○実用文(手紙・文など)</p>	<p>「読む」</p> <p>○「読む」の時間・場面を意識しながら読む            ○指示語や接続詞に注意しながら読む            ○小見出しをつける (キーワード・キーワード)            ○要旨をまとめる</p> <p>○さまざまな文章を読み味わう            ○関連する文章を読み、理解を深める (発展的読書)</p>	<p>「読む」</p> <p>○「読む」の時間・場面を意識しながら読む            ○指示語や接続詞に注意しながら読む            ○小見出しをつける (キーワード・キーワード)            ○要旨をまとめる</p> <p>○さまざまな文章を読み味わう            ○関連する文章を読み、理解を深める (発展的読書)</p>	<p>到達目標・具体的な学習活動</p> <p>乗入れ授業等(定期で行う)</p> <p>三台中台分論大会(高校から要員(教員)、モデルスピーチ(生徒))</p>	<p>乗入れ授業等(定期で行う)</p> <p>三台中台分論大会(高校から要員(教員)、モデルスピーチ(生徒))</p>
	<p>〈学習効果を高めるために、T.T等の研修に努め、積極的に中高間、中学校間の乗入れ授業を行う〉</p> <p>* 朝の10分間読書等を通じて、読書に親しむ態度を育てる。(推奨図書の設定) * N I E の実践</p>										



「卒論発表会」開催  
 ・自己評価  
 ・相互評価

\*「総合的な学習の時間」の活動(テーマ学習)の活動と連携して実践。(小論文指導にもつなげる)



はどうか」—これらの御意見は、本試案をより充実させていくためにたいへん貴重なものであり、今後、具体的な学習活動の工夫とともに、現在中学校側とも検討中である。

来年度から高等学校においても新学習指導要領が学年進行で施行される。教育現場は新しい時代に入ってくるわけである。国語教育も例外ではない。これまで大事だと思いがちでも、(少なくとも私は)後手後手に回してきた「話す・聞く」の学習活動がはっきりと国語教育の中心に据えられた。多くの文学作品、ひいては文学そのものが教科書から存在感を失いつつある。多くの日本人が日本人としてのアイデンティティを確認することを求めているかのごとき日本語ブームといわゆる「若者言葉」やカタカナ語の氾濫。国語教育を取り巻く環境は大きく変わりつつあるという実感は、すべての国語教師が感じているに違いない。このような時期に、本試案の作成をおして「国語教師」としての自分を見つめ直す機会を得られたことをありがたく思っている。今後、三校目、四校目と勤務校が変わっても、今回作成したカリキュラムを「国語教師としての指針」として大事にしていきたいと考えている。

#### 四 参 考 文 献

○『高等学校学習指導要領解説 国語編』

(文部省／平成十一年十二月)

○田中孝一編著『高等学校新学習指導要領の解説 国語』

(学事出版／二〇〇〇・七)

○河野庸介・金子守編著『中学校学習指導要領の展開 国語科編』

(明治図書／一九九九・一〇)

○丸山和雄・岩崎攝子編著『国語教育条規体系』

(おうふう／二〇〇〇・七)

○『日本語学 平成十四年四月号』

—特集 国語科教育におけるカリキュラム—

(明治書院／二〇〇二・四)

○『日本語学 平成十四年四月臨時増刊号』

—国語教育のための日本語研究—

(明治書院／二〇〇二・四)

○『日本語学 平成十四年六月号』

—特集 国語科教育における評価—

(明治書院／二〇〇二・六)

(鹿児島県立喜界高等学校)

## 【資料】 喜界地域中高一貫教育実践研究に関する基本方針

### 1 教育目標

6年間を通じた継続的な教育活動により、郷土を愛し自ら人生を切り拓く生徒の育成を図る。

### 2 基本理念

- (1) 6年間を見通した継続的教育活動により、基礎学力の定着と生徒一人一人の個性の伸長を図り、「自ら学ぶ力」「生きる力」を育む。
- (2) 地域に開かれた学校を実現し、地域と連携した新しい教育活動を進めることで、郷土を愛し自ら人生を切り拓く生徒、地域や社会に貢献できる人材を育成する。

### 3 教育方針

- (1) 学び続ける力の育成
- (2) 基礎学力の充実
- (3) コミュニケーション能力の育成
- (4) 感動と体験の重視

### 4 主な実践研究課題

- (1) 各学校間の連携体制に関する課題
  - ・ 学校間、職員間の連絡体制の構築
  - ・ 全職員の教育目標、理念への共通理解の深化
- (2) 教科指導に関する課題
  - ・ 6年間を見通した指導課題の設定
  - ・ 基礎学力充実のための効果的指導方法
  - ・ 教員の相互乗り入れの活用（補完的活用、TTの導入 他）
  - ・ 評価の在り方
- (3) 特色ある教科・科目に関する課題
  - ・ 「総合的な学習の時間」における中高連携の在り方
  - ・ 特色ある教科「きかい」の設定
- (4) 「生き方・在り方」に関する課題
  - ・ ガイダンス機能の充実
  - ・ 教育相談の充実
- (5) 生徒会・部活動・学校行事における生徒交流に関する課題
- (6) 保護者・地域・小学校との連携の在り方に関する課題